
ボイン・ラブ

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボイン・ラブ

【Nコード】

N7315I

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

ちびっこ向けのキュートなエロです。題名からハードエロを期待しないように。

「オレはボインがあれば飯三杯食えるな」

「オレなんて四杯！」

「うそつけ。ええかつこすんな」

「マジだよ！」

プリん市立プリん小学校の屋上、煙草をふかしながらおバカな話をしているのはたけしとよしおである（中学生のガキは真似をしないようにしてください。喫煙は50歳になって立派なおっさんになつてからです）

「あーボイン触りたいなあ」

「ロリ華先生に頼んでみるか」

二人は職員室へ行った。

「なあに」

「あ、あのロリ華先生！」

「なによ」

「そのあの」

なかなか言えない。

「変なの」

ロリ顔なのにむっちゃボインなロリ華先生。

むっちゃ触りたい！

触りたいぜベイビー（ベイビー）

触りたいぜベイビー（ベイビー）

むっちゃ触りたい悲しい夜のミッドナイト、イエー！

よしおの頭の中にロックンロールが響き渡る。

二人はとぼとぼと職員室を出た。

廊下を、でぶの男の子が歩いていった。

「もういい。あいつのもんでしまおうぜ」

「そうだな。贅沢は言ってられねえ」

おいと声をかけた。

「なんですか？」

「ボインもませろ」

たけしは、その朝青（ぴー！）龍にソックリな、でぶの男の子の背後にまわり、後ろからボインをもみ始めた。

「な、なにするんすか、先輩！」

「うるせえ」

二人は調子に乗ってもみまくった。

「ああん。先輩」

もみまくった。

「だめん。先輩」

もみまくった。

「先輩。いゃん。あふん」

だんだんむなくなってきた。バカじゃないかと思えてきて、でぶ少年の頭を思い切り叩いた。

「うわあああん。うわあああん」

ああ！神よ！

ボインの神よ！

なぜあなたは我々にボインを与えられないのですか？？？

どうしても、与えられないっすか？？？

平和を我らに！ ボインを我らに！

たけしとよしおはプラカードを掲げ、国会の前で訴えた。どこから持ってきたのかスピーカーまで使って重装備だ。

「これこれ。ボクたち。いいかげんにしなさい」

警備員がやんわり注意する。

「おじさん、奥さんいる？」

「ま、まあいるけど。何の話？」

「ふん！ボインを持ってるやつには、持っていないやつのは気持ちなんてわからないよ！」

スピーカー使ってわめくので実にやかましい。

何か言ってることがよくわからんが、かわいそうになってきた警備員のおっさん。

「じゃあ家来る？女房のでよかったらもませてあげるよ」

「マジ????」

おお！神よ！ボインの神よ！ありがとう！！！！

「おかえりイあなたあ」

「ああ。光子。頼みがあるんだ」

「なあに」

二人はおっさんの奥さんを見て驚愕した。

なんと奥さんのボインは円錐形、すなわち、むっちゃとがっていたのだ。

「こ、これはいったい」

「はっは。かっこいいだろ？このとんがったところに惚れちゃったわけやな」

「やだよー父ちゃんたらあもー」

二人してげらげら笑ってるが、よしおとたけしは笑えない。

刺さったら痛そう！

「光子のボインはね、実はミサイルにもなんねん。ここのほくろを押すとね」

「あつ父ちゃん！バカ！」

ずがああああああああああん。

たけしとよしおは入院した。全身包帯で巻かれミイラのようなだ。

「うう何でオレたち。しくしく」

「くそっボインの神め」

嘆いていてもどうにもならぬ。悲しい現実だ。

看護婦さんがやって来た。

「うおっ」

「わひっ」

むっちゃボインやないか！

たけしとよしおはもっこりしてきた。

実にまずい。

今から尿をとるのだ。

「はーい。たけちゃん。ズボン下げますよー」

「あわわわわ」

しばらくお待ちください。

ぼこぼこにされ、床にひっくり返るたけし。ボインを揺らせ、去って行く看護婦さん。

「うう。何でこんな目に」

「大丈夫かい？ たけちゃああん」

とその時、枕元がピカッと光った。

「む。なんや？？？」

ものすごい煙。秋刀魚さんまを焼いてるのか？？？

煙の先から現れた初老の男性。

「だ、誰？」

「わしか？ 誰と思う？」

うぜえ。早く名乗れ。

「ま、まさか」

「そのまさかじゃ」

たけしとよしおは声を合わせ叫んだ。

「「ボインの神！」」

「正解」

でも怪しいなあと二人は思う。ただのじじいやん。

「本物ですかあ」

「む。疑っておるのか。これを見よ！」

着物を脱いだ。

ぷりんぷりん！

二人の目の前に現れる実に形のよいボイン。

「ま、間違いない。ボインの神だ！」

顔を見るとじじい。

胸を見るとめっちゃボイン。

実に気持ちが悪い！

「いったいなぜ神様が」

「ふっふ。お主らがあまりにボインボインやかましいのでな」

二人は大喜び。おお！ついにボインがもめるのか。

でも、じいさんのボインもめとか言われたらいやだな。

「ふっふ。なにしかめ面をしとる。別にわしのをもめとは言うとらん。これを見よ」

「こ、これは！」

差し出された肉まん二個。

「は？」

「さらばじゃ！」

また煙。

「ごほっごほっ」

二人は、顔を見合せ、しょうがないので肉まんを食べた。肉まんをもんでも意味がない。

再び、学校の屋上。すでに退院してる。

退院したけど心は晴れない。ボインをもめないという現状はまるで変わっていないのだ。

二人して煙草をふかしながら、ため息をつく。

「あーあ。かったるいぜ。ボインがもめないなんて」

「まったくだ。ボインがもめない人生なんて、クリープの入ってないコーヒーみたいなもんさ」

「お前ら」

げ。珍太郎先生。

二人はあわてて煙草を消した。

「オレにも一本くれよ」

「はあ」

たけしは珍太郎先生に煙草を一本あげ、火をつけてあげた。

「ふーっ。お前ら浮かない顔してるな。何か悩みでもあるのか？」

「はい。ボクラ、ボインがもみたくてもみたくて勉強に手がつかないんです」

別にボインとか関係なしに勉強はしたくないのだが。

「ふうん。そいつは大変だな」

そういうと、珍太郎先生は煙草をポイ捨てし、去っていった。

「何だよ。珍先生、ストーリーと全然関係ないキャラやん。煙草吸いたかっただけやん」

二人は余計憂鬱になってきた。

しばらくして、ロリ華先生が屋上にやってきた。

「あっあんたたち！何で煙草吸ってんの！」

ロリ華先生は二人から煙草をもぎとって、頭をこつんとした。
「痛てえ」

「何で。ロリ華せんせええ」

「珍先生に屋上行って来いて言われたもんだから」

二人は目を輝かせた。わお！珍先生、粋なことをするう！

二人はチャンスだとばかりにロリ華先生に頼んだ。

「ロリ華先生！おっぱいもませてください！」

「ボクも！」

「えええ。そんなあ。あたしのおっぱいもんでもいいのは珍先生だけよう」

急に煙がもくもくもく。まさか。まさかとは思うが展開からして間違いない。

「「ボインの神！」」

「むははははは」

ボインの神はロリ華先生の胸をいやらしくもみ始めた。

「い、いやん。おじいちゃん、やめて」

「むは。むは。むはははは」
もむ。もむ。もみまくる。

たけしとよしおはぐくりと唾を飲み込む。うはあ。羨ましい。

「いゃん。お願い。やめて」

「むははははは。むひひひひ。むほほほほ」

「じじい。殺すぞ！」

ボインの神は、ロリ華先生が急に大声を出したのでびっくりして消えていった。

「たけし君とよしお君のバカ！」

二人はロリ華先生に思い切りほったを叩かれた。

ロリ華先生は顔を赤らめ、足早に去っていった。

「ひどいや。オレら関係ないのに」

「ちきしょう。ボインの神め」

下に目を落とすと。

また肉まん二個！

仕方ないので二人はボインをもむ練習をすることにした。

たけしが胸に肉まんをくつつけた。

「さあよしお。もめ」

「う、うん」

よしおは肉まんをもんだ。

「どうだ。楽しいか？よしお」

「全然楽しくない」

はああああと深くため息をしながら二人は肉まんをもしやもしや食った。

「こうなったら、よしお。お前の妹のもんでしまおうぜ」

「無理だよ。全然ボインじゃないもん。ペチャパイだもの」

「この際、贅沢は言ってられねえ」

「ただいまー」

よしおの家。

「母ちゃん、梨花いる？」

「部屋で勉強してるよ」

二人は二階の梨花ちゃんの部屋のドアをノックした。

「なあに？あ。たけしさん」

梨花ちゃんは少し顔を赤らめた。実は梨花ちゃんは密かに、たけしのことがちよつと好きなのだ。

「実はな。おっぱいもませてくれ」

「えええええええ」

梨花ちゃんは困ってしまう。大好きなたけしさんにもまれるなんて、どうしようどうしよう。ドッキドキ。ああん。嬉しいような恥ずかしいような。

でもちよつとむかつく。こういう頼まれ方だ。

「な。な。頼む。ちよつとだけ」

「そんなあ」

また煙がもくもくもく。ああ。わかつてはおるが、わかつてはおるが二人は叫ぶ。

「「ボインの神！」」

「むひゃひゃひゃひゃ」

ボインの神（ボイン以外、ただのハゲじじいだが）は目を点にしている。

「ペ、ペチャパイやないか！わしはペチャパイには興味ない！」

梨花ちゃんは、「ひどーい」と腹を立てた。

「このくそジジイ！」

グーで、ボインの神の腹を殴った。

「ぐはっ」

ボインの神はひざまずき、口から血を吐いた。

たけしとよしおも「お。梨花ちゃんやるウ」と便乗してボインの神のケツを蹴飛ばし

しばらくお待ちください。残酷すぎてちびっこには読ませられません。

「はあはあはあ。どうしよう。たけちゃん。ボインの神、殺してしまおうた」

「しょ、しょうがねえ。おい。梨花ちゃん、よしお。ボインの神の死体を持ち上げろ。捨てに行くぞ」

「う、うん」

三人はえっほえっほとボインの神を運んで、家の車庫に停めてあるヘリコプターに積んだ。

そして、飛び立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7315i/>

ボイン・ラブ

2010年10月8日14時40分発行